

### 第13の岐路・4カ年の師範生活

この青春の時期の4年間、当時名古屋にあった愛知県第一師範の生徒として過ごしたのは、先にも触れたように、私にとってはまったく「運命的必然」ともいうべく、従ってこの場合には、「ifもし」の仮定は考えられないというべきほどであった。第二師範（岡崎）ということも、まして「中学」にとは、おおよそありえないことであったが故である。しかも後に述べるように、「神天」の深き配慮は、師範卒業の任地を西三河とし……かかる事はそれまで全く絶無であったことである……さらに人生晩年に岡崎を中心とする、三河地方の教育界との道縁をが生じた縁は、すでに遠くここに胚胎していたことであったと思われることである。

にもかかわらず、今やその師範生活の記述を始めようとして不思議である事は、受験地が何処であったかも忘れたばかりか、第一入学当日の記憶さえ全然ないわけである。入学の当日には養父が荷車で十里の道を遠しとせずはるばる布団などを運んでくれたはずだが、その思い出さえおぼろげである。という事は師範の入学は私にとっては、まるで運命的必然であるかに受け取られていたためであろうと思われる。

かくて師範入学の第一印象は、その厳しい階級制であったが、特に私らの場合、不幸であった事は、盗難事件があって一入厳しく、上級生が竹刀を持って自白を強要したことであって、今もそれは忘れられない。かくして新入生の1人が「退学」の悲運に遭って、事件は一応落ち着いたが、私には当人がはたして真の犯人であったかどうかの疑いはその後も長く消えなかった。

同様のことは、入学後2年ほど後にも起こった。今回は私と同室の上級生で文学肌の友が、漱石の「吾輩は猫である」を持っていたという理由で、1週間の謹慎を命ぜられたことが発端で、その後も当人の生意気な態度は変わらないとして、上級生の一団が深夜道場で、竹刀で殴ったと聞いたが、やがてその友は気の毒にも退校となった。しかるにその頃、私は夏休みに密かにドフトエフスキーの「死人の家」（後に「死の家の記録」となったもの）を行李の底に隠して耽読した故、その友達の方がはるかに善人であったということがいえよう。

この同室の上級生は稲熊金七さんと言ったが、私の同級であった青木茂男くんも、文学好きが嵩じて、謹慎や退学等にはならなかったが、舎監の覚えはよくなかった。また同級生中、その父君は県下有数の大校長であったが、ついに退学となったが、私はこの友とも親しくて、夏休みには共に旅行をしたこともあったほどである。されば私は、これら退学組の連中とも一脈相通ずるものがあり、それらはいずれも「話のわかる」連中であったが故である。しかしそのために私は、学校当局に睨まれた事はなく、終始級長であったが、

それが最後に爆発した。それは卒業一週間前、「師範教育改革論」と題する投書が名古屋の大新聞であった「新愛知」紙上に発表されたことであるが、この問題については後に改めて述べることにする。

さて以上は、やや特殊異常なる面について述べたが、それというのも師範教育は、もちろん軍隊ほどではないけれども、軍隊を手本としているところが少なくなかった。全員寮生活であって、すべてベットで、年に一度は全員軍装で夜間行軍があつて、午前2時ごろ最後の突撃にて終了。それより学校に帰りつけば概ね明け方となつたことである。

また年に2、3回は火災防止のために、全員の不時呼集が行われたことである。これは全く予告なしの上に、整装の上ゲートルまでもつけねばならなかつたので、運動神経の鈍い私にははなはだ苦手であつたのである。でも苦手といえは機械体操であつて、尻上がりができないばかりか、跳び箱さえ跳べない身で、木曜日の機械体操が済めば、金土日と快晴が続くような感じがした。

では師範時代に何が楽しかつたかという、ほとんどそれはないといつていいだろう。講演も小学校時代ほどの楽しい思い出はない。もちろん運動も対外試合が禁じられていたため、弁論部もなかつた。その間強いて言えば、日曜日の外出で古本屋巡りをするのであつて、「明日から試験」という前の日の午後、古本屋巡りにわざと外出するなど、という稚気があつたほどであつた。さればといつて師範生活は、如上二、三の苦手の時間を除いては、特に「嫌だ」と思つた事はない。ちょうど不幸と思わないことが幸福である証拠と言われるにも似ている。しかし私はもともと型にハマられることを好まぬ性質で、師範教育を楽しかつたとは思わないのが当然である。だがこれは高師においてはやや緩和されたが、これは大学に入つてからも、アカデミズムという、巨大なる見えない枠があつたため、学問上私が一切の束縛より離れて、真の「自由」の身となつたのは結局、大学卒業後であつたというべきである。されば人間は結局は、絶対孤独に即する絶対自立の自由こそが、真の自由と言うべきであらう。

されば私にとって、比較的楽しいと思われたのは、2月17日のペスタロッチ祭、12月14日夜の義士祭くらいのものであつた。ペスタロッチ祭は、教育の殿堂である師範学校としては、ある意味では当然というべきものであるが、のちに私の就職する天王寺師範では、ペスタロッチ祭は1度行われただけで、これに反して広島高師では実に盛大であつて、ペスタロッチ祭運動の全国的中心である感があつた。福島政雄、長田新の二教授がおられた故である。

では、師範教育が私にとって最も意義があつたのは何かといえは、それは優れた先生たちに接することができたことで、なかんずくその最たるものは校長の三浦渡世平先生の威

容に接し得たことであって、もし同じ師範であっても、「モシ」第二師範であったら、同じ師範教育であっても私の運命の上には、けだし絶大なる差が生じたであろう。というのも三浦先生は旧幕臣の家系であって、先生は私が生涯接した人物の中では、最高の風貌の方であって、その次は岡田式静坐法の祖岡田虎二郎先生である。したがって当時の愛知師範には、出色の先生があり、教頭の和田喜八郎先生が隠者新井奥穂先生の弟子の一人であった事はつい最近わかったことである。また後年に八大教育思想の一つであった千場命告先生にしては、全く超凡破格の資であったが、後に京大選科入学を拒まれて、「悲劇の人」となられた。というのも、先生には遠く佐藤信淵、さらには安東昌益などに通ずる、単に破天荒などというにとどまらず、文字通り「超凡破格」の資質が恵まれていたが故である。

以上のほかにも今一人、八木幸太郎先生も独学大成の士であって、晩年満鉄の教科編集官となられ、さらに定年後はその退職金を投じて、北京に留学5年有余にして万卷の書を買って求められて帰国なされた。私が西晋一郎先生の名を知ったのも、実は師範時代であって、広島高師には西晋一郎というストイックな隠れたる学者がいると言われたことによることである。

さて師範時代の最後に私は図らずも未曾有の大事件を惹起したが、その前に私は今ひとつの無謀極まる大問題があった。それは文字通り命を失うほどの事件であった。それは何かというと師範の4年の夏休み、親しかった友人と2人で、船も雇わずに、衣浦湾…知多半島と、その対岸の西三河の地とを隔てる湾を横断しようとした暴挙である。それは学校で遠泳50丁を合格したが唯一の頼みであった。しかるに学校では50丁泳げたといっても、それは知多半島の西岸沿いに、しかも救助舟が横についての事であった。

しかるに私らの計画は、衣浦湾の横断であって、そこには潮の緩慢があるのも考えない無謀なことであった。おまけに距離も三里あまりというに至っては、全く「死」のほかない暴挙というべきであった。ではなぜ死なずに、その後70年後の今日、このような回顧談を書けるかということ、さすがに無鉄砲であった私らも、水路だけは半田と大浜間の船の通う通路に沿って泳いだからである。やがてほぼ予定した時間になっても未だ半分ほどしか来ていなかったの、多少の余力のある間に…相談の上、折柄往復船の来るのを見て手を挙げ救助を乞いたが故である。

さればこの「if」は、一生のモシモ（if）の中では最重なるひとつと言うべきである。